

# 高木 晴子(たかぎ・はるこ)

## 1、プロフィール

俳人。高浜虚子の5女。横浜フェリス女学院卒。京都の句会で初めて俳句を作る。虚子に師事。「玉藻」代選を経て、昭和 59(1984)年俳誌「晴居(はるきよ)」を創刊。主宰を務めた。

<生没>

1915(大正4)年1月9日 ~ 2000(平成12)年10月22日

<代表作>

みちのくの帰雁に夜風悲しとも

空の色うつして雪の青きこと

初蝶は影をだいにして舞へり

『高木晴子句集』昭和 26 年楡書房発行。序文高浜虚子。『晴居』昭和 52 年玉藻社発行。『高木晴子集』昭和 53 年俳人協会発行。『みほとり』昭和 57 年東京美術発行。文集『遥かなる父・虚子』昭和 58 年有斐閣発行。

<青森との関わり>

夫、高木良一が日銀青森支店長として赴任したことから昭和 23 年9月から昭和 26 年5月まで3年間青森市に在住。

## 2、作家解説

神奈川県鎌倉生まれ。父、高浜虚子。母、いとの5女。昭和7(1932)年、横浜フェリス女学院卒。この年、虚子に連れられて京都に行き、初めて俳句を作り、句会に出る。以後、虚子に師事。昭和9年、高木良一(日本銀行勤務)と結婚、大森山王に居住。昭和 19 年、太平洋戦争中は虚子一家と共に長野県小諸に疎開。昭和 20 年、夫の転勤に伴い秋田市に移住。初めて自分の句会「柿の花」を持つ。昭和 22 年、<風荒き夜風に雁の帰るかな><みちのくの帰雁に夜風悲しとも>を詠み、ホトギス7月号の巻頭となる。昭和 23 年9月、夫、青森へ転勤、浦町字橋本日本銀行舎宅に居住。3年間、増田手古奈、村上三良、佐藤多太子らと句会を

持ち、地域の俳句仲間との交流を深めた。10月31日、浅虫温泉東光館で歓迎句会を行う。〈氷雨降る温泉宿の庭の小菊にも〉を詠む。昭和24年4月22日～27日、青森放送から「季節の感覚—俳句を通して」〈北国に今来し春を身に受けぬ〉〈着ぶくれて津軽の人になりすまし〉を放送。昭和24年、ホトギス同人となる。虚子、姉星野立子、宵子らが青森訪問。昭和26年5月8日、夫、東京栄転の送別会が催された。〈をりからの落花の舞へるその中に〉を詠む。昭和43年5月、北南米の旅、8月青森の旅。昭和45年6月、新潟、北海道、青森の旅。10月、立子倒れる。昭和46年1月から立子「玉藻」の雑詠代選を昭和58年6月まで行う。昭和54年5月、ロンドンキューガーデンに虚子の句碑を建立した功績は大きい。昭和58年、山寺全国俳句大会選者となる。昭和59年1月、「晴居」創刊、主宰となる。〈来し方を行く方を草朧かな〉の句碑除幕。昭和48年、若手育成のため「若藻」発刊。晴子選百号まで続く。平成12(2000)年10月7日～9日、晴子一行が青森・函館3日間の旅。青い海公園周辺吟行、三内丸山遺跡見学、浅虫温泉へ。〈夕づつをかかげ暮秋の津軽富士〉を詠む。10月11日、鎌倉市内の病院に入院し、22日、永眠(85歳)。戒名は秋高院良詠晴居大姉。